

諸磯様式における深鉢形土器の形式分化

— 深鉢形土器の形式分化と時期差・地域差について —

関 根 慎 二

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- | | |
|----------------|--------------|
| 1. はじめに 形式・型式 | 4. 段階別カタチの特徴 |
| 2. 深鉢のカタチと分析方法 | 5. 地域の概要 |
| 3. 諸磯式土器の時間軸 | 6. まとめ |

—— 要 旨 ——

形式は、道具としての機能性や用途に関わるカタチを抽象的に捉えるための概念である。モノが制作される動機の根本には、ある機能や用途目的に対する要求がある。その要求にかなう素材とカタチがイメージされて形式が決定される。その実体化されたものが型式である。そのため形式は、保有する形式の種類によって、その社会の生活文化内容や機能的水準が変わってくるのである。諸磯様式の深鉢を取り上げ、深鉢器種の下位レベルでの形式分化について調べる。形式の所有する変動は、型式に反映され、型式組列となって現れる。本稿では、深鉢の形式分化による個々の機能・目的・用途について検証するのではなく、形式分化が、諸磯様式の中で時期的・地域的に変動し、実態化された型式としての組み合わせを検討することで、諸磯様式の時代性・地域性を検討しようとするものである。

深鉢形式の煮炊きという用途は、時代や生活文化内容によって特殊化・限定化し、それがカタチの変化や種類の増加になって現れるのではないだろうか、という仮説の元に深鉢のカタチについて数量的把握を行った。その結果、諸磯a式段階ではカタチの種類が少なく、諸磯b段階に増加する傾向が見られた。諸磯様式の細分時期や地域が異なると、カタチに対する指向性が代わり、その所有するカタチに違いが見られた。このことから、形式の具体的・実体的なものとして、カタチから見た型式組列によって、時期差や地域差を検証する手段としたい。

キーワード

対象時代 縄文時代前期後半
対象地域 群馬・東京
研究対象 縄文土器形式・型式論

1. はじめに 形式・型式

諸磯式土器の系統・変遷の研究史は古くからあり、縄文土器の編年研究の始まりともいえる（関根1999）。この長い研究史の中で、鈴木徳雄（1979）、中島宏（1980）、鈴木敏昭（1980）らが、諸磯式土器の編年・文様変遷研究を行ってきた。これによって、主に諸磯式土器の古段階から新段階への編年的位置づけがまとまってきたといえる。これらの編年研究の中、今村啓爾は「土器の変遷を型式学的に解明しようとする場合、器形、文様帯、個々の文様、施文具、施文の方法、成形、成形の手法、胎土、焼成についてなどいろいろな点に注目しなければならない」として、施文順序から編年研究をおこなった（今村1981）。この研究は、従来の土器文様の変遷による編年研究から一步進んだ研究として評価される。

この研究以降、谷口康浩、松田光太郎、細田勝、金子直行、今福利恵、可児通宏等々様々な人達によって、諸磯式土器の編年研究が進められてきた¹⁾。これらの研究の結果、諸磯式土器の変遷過程については、その段階区分に、各人での差異が認められるが、諸磯a～諸磯cにいたる変遷過程については、おおよその共通理解が得られているのではないだろうか。諸磯c式の細分について、地域差とするのか、時期差とするのか、まだ解決されていない問題も残っているが、この問題についてもいずれ解決されることと思われる。

諸磯式土器の変遷・編年の基礎的作業が、数多くの人達によって成果となった今、次の段階としての試み一人間の行動や社会環境の変化について考えてみたい²⁾。そのための一つの方法として、深鉢形土器のカタチについて分析してみようと思う。

土器型式における土器のカタチにも文様と同様の情報（範型）の流れ・広がりがあり共有されていく物と考えられる。その中で、カタチは実際にどのように情報として伝わるのであろうか。土器の型式には、広がり・空間がある。それは、小林達雄の言う範型論によると「縄文土器の制作者が所属する集団に保持される模範的な型（範型モデル）の具体的なデザインなのである。それらの範型は、集落のどこか片隅にでも転がっているものではなく、集落を構成する各人の頭の中に等しく描かれる好み・信念などと合体した観念の一部である。いかに創造性豊かな土器作りといえども所属する集団が是とする範型の枠を超えて形を決定し、文様を施すことは出来ないのである。」（小林1978）この範型を共有する集団の存在が、地域に広がり活動するからと考える。

形式とは、道具の種類であり、機能を限定しているものである。深鉢という形式は、煮炊きとしての機能を有する。深鉢の機能・用途にたいして特殊化・限定化されたものが、深鉢の様々なカタチとして実体化され、目に見えるモノとなって現れていると考える。この実体化さ

れたものが型式であり、年代や地域によって異なった型式組列となっている。そのカタチの組み合わせ（型式組列）が、諸磯様式の中で時間や地域の変位によって、機能分化³⁾しているのか捉えることを目的として分析する。深鉢を取り上げたのは、第一の機能として煮炊きという機能・用途のきわめて限定されている道具だからである⁴⁾。深鉢形式の煮炊き機能にたいして、時間や場に対する目的・用途によって異なるカタチの深鉢を使用することは、本来の深鉢形式の下位レベルで、深鉢が形式分化しカタチとなって現れると考える⁵⁾。

深鉢の形式分化によって作り出される個々の機能・目的・用途についての検証は、土器の出土状況や土器に付着した炭化物分析、土器の容量、その他様々な分析を行わなければならない、困難なものがある。そのため本稿では、深鉢の機能・目的・用途について具体的に検討するのではなく、形式分化が諸磯様式の中で時期的・地域的に変動し、実態化された型式として表されるカタチの組み合わせを検討することで、諸磯様式の時期的な特徴や地域による特性を考えようとするものである。

従来、諸磯様式の中に見られる特徴的な文様や器形などの組み合わせから、時期差や地域差などの検討が試みられてきた。本論では、カタチの違いに注視することで、文様の変化から見た諸磯様式とは異なる結果や、新たな問題点が浮上するのではないだろうか。

2. 深鉢のカタチと分析方法

深鉢の構造は通常、口縁部、突起部、胴部、底部からなっている。深鉢土器の器形について、①口縁、②口頸部、③胴部、④突起の四つの要素を分解してみた。土器の器形には、底部の形も要素としてあげられるが、諸磯様式の場合、尖底はみられず平底が一般的であることから、深鉢のカタチ要素の分析から外し①から④の要素について、「有・無」（0・1）の二項で分けた。これは、波状口縁と言った場合に、波状の度合いは土器の制作者によりその大きさの形が異なるからで、同じように頸部の内湾や外反といった度合いについても、制作者の意志によるものである。そのため、波状や内湾・外反の度合いを考慮すると、度合いの程度による分類が無数になってしまう。土器のカタチを統計的に集計するために、単純化して分類した⁶⁾。（図1左）

部位別分類基準

1) 口縁部の形 口縁部の形は、平口縁と波状口縁に分けた。平口縁に小突起状が付き波状に見えるものは、平口縁に分類し、突起が付くものとして扱った。

タイラ 0、 ナミ 1

2) 口頸部の形 口頸部の形は、口縁～頸部にかけて内湾しているものと、外反しているものによって分けた。

ガイハン 0、 ナイワン 1

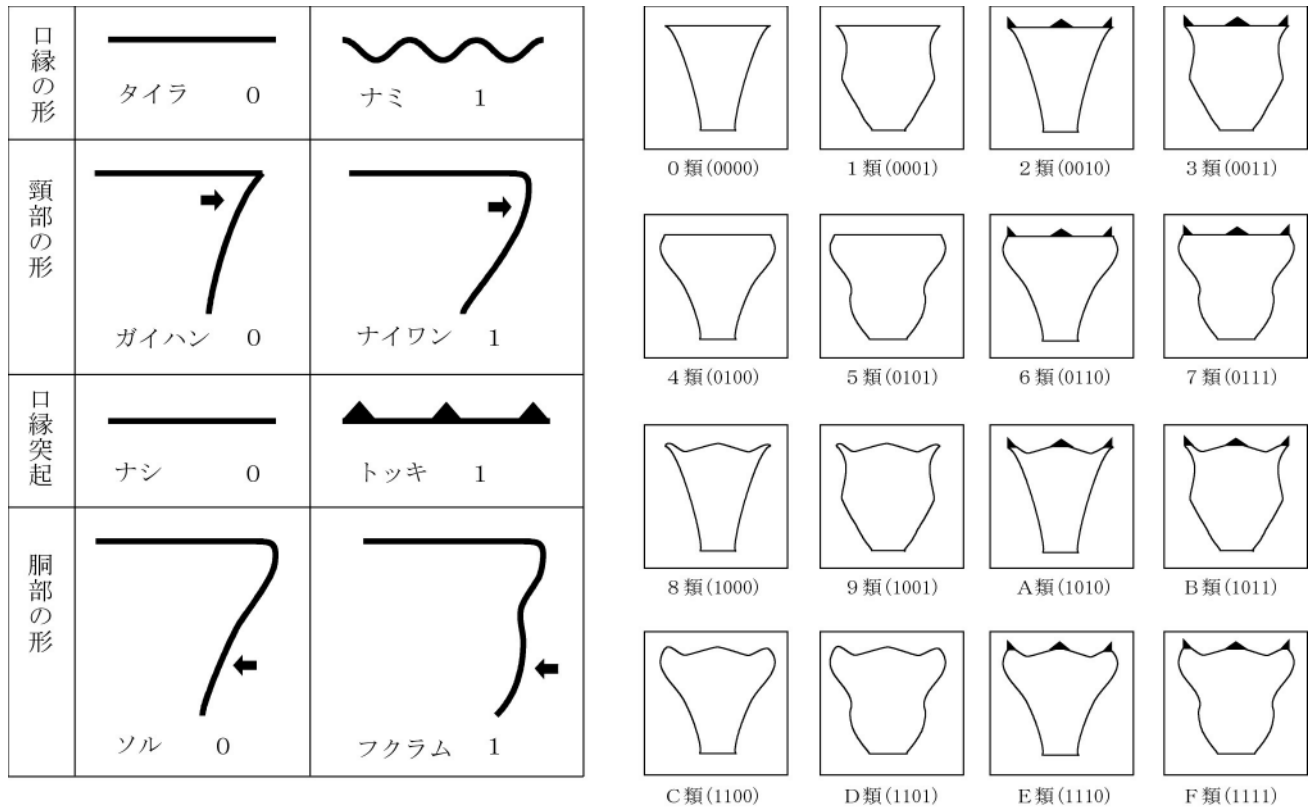


図1 深鉢の部位別形態と基本形類

3) 口縁部突起 口縁部突起は、口唇部や口縁部に突起を持つものと持たないものによって分けた。ボタン状・棒状等の貼付は、突起としたが、浮線文や結節浮線文については、文様とし突起としなかった。

ナシ 0、 トッキ 1

4) 胴部の形 胴部の形は、底部から口縁部に向けて外反していくものと、胴部中程で膨らみを持ち、底部に向けてすばまるものによって分けた。

ソル 0、 フクラム 1

以上、深鉢の形について、4項目の要素について分け、それぞれの属性を0と1に分けた。これによって、0と1が4種類(4桁)あることから、0類からF類の16種類の基本器形(第1図右)を見ることが出来る。この各類の基本器形について、本文中では形類⁷⁾と呼称する。

3. 諸磯式土器の時間軸

土器形式分化の変化を見るために、段階分けの時間軸を設定した。諸磯様式の編年に付いては、縄文土器総覧の諸磯様式で細分した編年(関根2008)を元に、諸磯b式から諸磯c式にいたる部分に1段階設定し、全体で9段階に分けた。群馬県域では、諸磯b式から諸磯c式にいたる段階の資料がまとまっていることから、新たに1段階加え9細分による分析とした。(図2)

1段階(諸磯a式古)本段階は、口縁部文様帯を縦位

区画し、竹管による平行沈線、爪形文による施文を主としている。黒浜式から諸磯a式移行期の土器群は、羽状縄文系土器群に見られる菱形文・鋸歯文の系統を引く米字文(対角線文)や肋骨文の文様を持ち、繊維土器の残存があり古い様相を持つ。

米字文は、口縁部と胴部の文様帯を区画し、縦位の区画線に対角線を施文。文様帯や対角線間に磨消縄文の手法をとる(図2-1・2)。文様の交点に円形の刺突文を加える。肋骨文(図2-4)は、平行沈線や爪形文による口縁部文様帯区画内に縦位の区画を施すことから始まる。縦位の区画線間を弧線により連結し、レンズ状や半円状になる。その交点に円形の刺突を加える。波状文は(図2-3)、やや幅の狭い口縁部文様帯に鋸歯状や波状の文様を平行沈線や櫛状の工具により施文される。

2段階(諸磯a新)本段階では、縦位区画の消失過程にあり、入組木葉文(図2-7・9)がみられるようになる。木葉文は、口縁部文様帯内にある肋骨文様の縦位区画が喪失していく中での変化から発生した文様である。平行沈線や爪形文により施文される。文様内に縄文が施文され、文様間は磨消縄文が顕著である。肋骨文は、縦位区画に接続する弧線が直線的になる。(図2-11)。波状文(図2-8)は、口縁部文様帯を多段に区画し、鋸歯状や波状になる横位の沈線を施文する。円形の刺突文列を縦位に施文することで、縦区画を意識する。この

他に、縄文地文の土器に円形竹管文の刺突文が単独で施文され、縦位分割の意匠となるものがある（図2-10）。浅鉢は、前段階ともに屈曲のないボール形（図2-12・13）のものがある。

3段階（諸磯b式古）本段階では、諸磯a式の口縁部文様帯の縦位区画優先が崩壊し、木葉状入組文から派生した文様が主体となる。竹管の工具も諸磯a式の幅の狭いものから幅広へと変わっていく。諸磯a式の伝統を引き継ぐ波状文の土器（図2-17）が終焉を迎える。幅の広い平行沈線による波状と直線を交互に施文した後、縦位区画している。木葉状入組文は、幅広の爪形文による木葉状入組文に進化する（図2-15）。また、二単位的大型波状口縁を持つ土器が、この段階で出現する（図2-16）。浅鉢にも、二単位波状の物があり、この段階に二単位の土器が特徴的に見られる。浅鉢の口縁部には、小さな孔を持つものも出現する。

4段階（諸磯b式中1）文様施文手法は、浮線文、沈線文（図2-20～22）が主体となり、幅広の平行沈線・爪形文施文の二単位大型波状の土器（図2-23）がこの段階に残る。前段階では、文様帯が口縁部と胴部に区画されていたが、それぞれの文様帯で横位区画が発達し多段化して施文されるようになる。胴部文様帯にも横位区画による文様帯を持つようになる。深鉢口縁が波状になり内湾するものが多くなる。波状部に獣面把手（図2-20）や粘土瘤が付けられたりする。

前段階にその出現の傾向が見られた有孔浅鉢（図2-24）が多く見られるようになる。有孔浅鉢（図2-24）は、竹管による木の葉文を持つものが主体となり、屈曲を持つ有段の形を呈するようになる。浅鉢は、胴部下半に屈曲を持つものが主体となる（図2-25）。

5段階（諸磯b式中2）本段階は、キャリパー形土器の屈曲の度合いが強くなり（図2-26、28、29）、横位に区画する文様帯の幅も狭くなる。口縁部の文様が、前段階の対弧状の文様で二帯構造ではなく、入組状渦巻文などによる一帯構造になってくる。一方では、（図2-27）に見られるような口径部に幅広く文様帯を持つ土器が見られる。幅広の平行沈線に代わり集合沈線と浮線による文様施文の土器になる。有孔浅鉢は、器面に木の葉文様を掘り込むのではなく、塗彩され文様を描くものが多くなる（図2-30）。

6段階（諸磯b式新）本段階の資料は、浮線文が少なくなり集合沈線施文の土器が主体となる。浮線文の断面形が中段階では、かまぼこ形だったものがこの段階になると扁平になる（図2-33）。口縁部の屈曲がさらに大きくなり、靴先状になる（図2-33・34）。獣面把手の形骸化したボタン状の突起が付けられる。口縁部文様は、口縁の屈曲部の上下で二帯構造となる。各文様帯は狭く、波状部に渦巻が縦長になった入組渦巻文や弧線の「()」、

「」状の文様が施文される。有孔浅鉢は、無地に塗彩される。

7段階（諸磯b-c式）本段階は、沈線による施文が主体の土器。文様は集合沈線による施文によるものが多い。口縁部文様帯が狭くなり、横位の文様区画の中に小さい「鍵の手」状の曲線（図2-38）や、横位区画のみのものが主体となる。胴部文様は、集合沈線による横位の区画であるが、この区画が、前段階よりも間隔が狭くなり矢羽根文などの集合沈線による施文が充填される（図2-36）。胴部中段の膨らみ部に入組状渦巻文や矢羽根文として施文される。口縁部には、前段階に見られた、円形貼付文、さらにこの円形貼付文が棒状の貼付文になったものがある。また、口縁部にある貼付文の部分が内折し、窪みを持つ波状口縁の土器が出来る（図2-36）。

8段階（諸磯c式古）本段階は、口縁部に付けらる結節浮線文・貼付文様と胴部文様帯が拡大化し縦位区画を意識するようになるのを特徴とする。文様施文手法は、半截竹管による集合沈線・貼付文による隆帯上への刺突がある。

諸磯c式土器の系統には、2系統あり、粘土紐に半截竹管で結節を加える結節浮線文系統（図2-41・42）と貝殻状・ボタン状・棒状貼付文による貼付文系統（図2-43・44）がある。それぞれ主体となる分布域を異にし、結節浮線文系土器は、西部地域に、貼付文系土器は、東部地域にある。本段階の特徴は、口縁部文様帯と胴部文様帯が区画される。口縁部文様帯は幅が狭く、4単位を基本としている。貼付文土器は、口縁部に四単位の粘土貼付文を持つ。胴部は、縦位の区画線と対弧・矢羽状の文様を持つ。結節浮線文系の土器は、口縁部に棒状の結節浮線文が施文される。有孔浅鉢は、無文地のもので肩部から胴部への屈曲が強くなる（図2-45・46）。

9段階（諸磯c式新）本段階の特徴は、口縁部文様帯の幅の拡大にある。胴部文様帯は、多段に貼付文（図2-47・48）や結節浮線文（図2-49・50）がされる。結節浮線文系の土器は、4単位の波状口縁の土器が多い。施文される文様も4単位を意識したものになる。貼付文系の土器では、口縁部・胴部の文様とも縦位の単位性を持たない土器が多い。有孔浅鉢の類例は少ない。（図2-51）は、お椀形のものである。

4. 時期別カタチの特徴

基本となる群馬県域から出土した深鉢について前項の段階別に、各要素について分類した基準で集計したものが、第1・2表・第3・4図のグラフである。この分類によるカタチの概要を段階別に見てみたい。第5図～11図は、集計表を元に深鉢の形類についての出現度（保有度）を表している。基本形類に集計した割合によって網

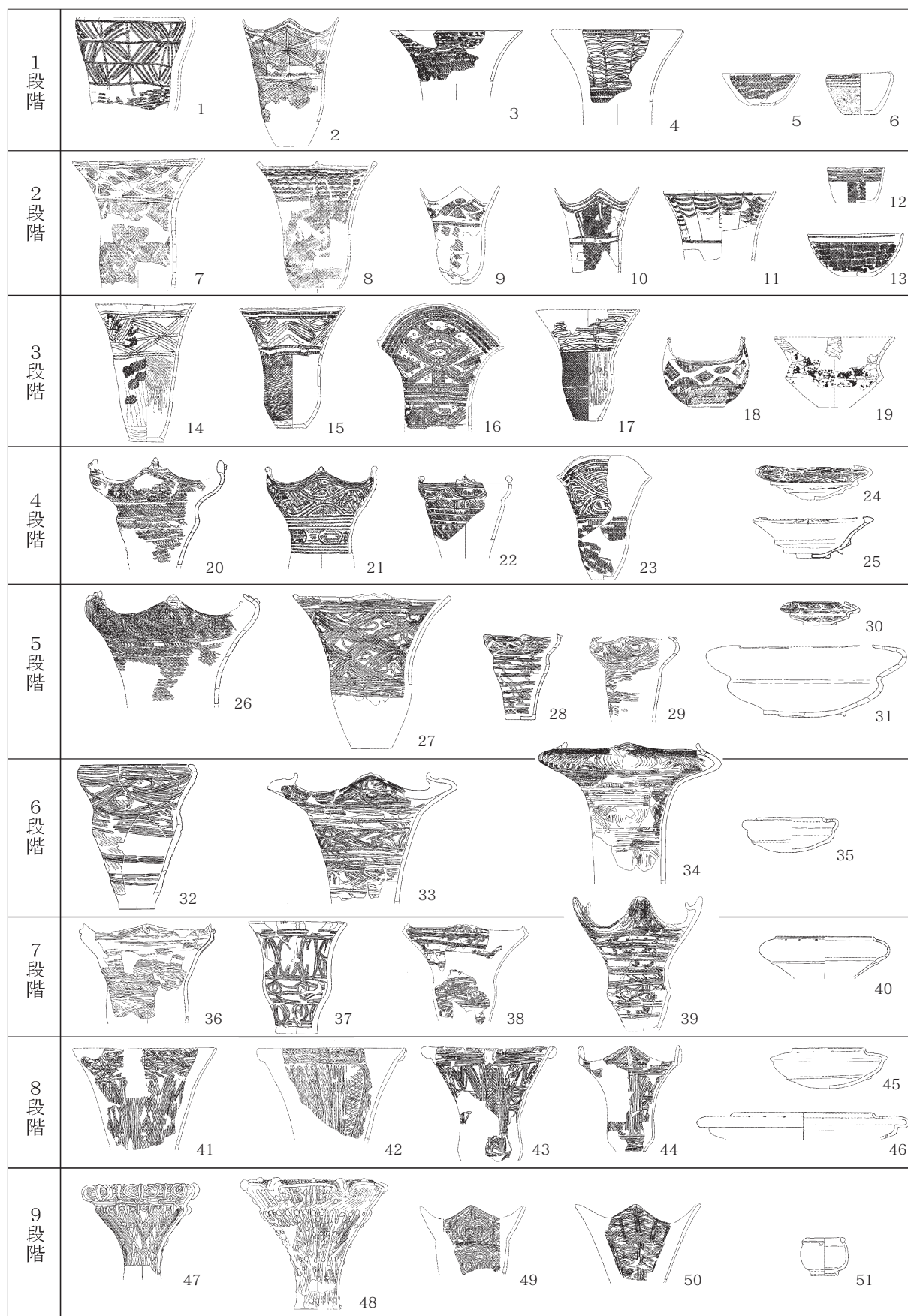


図2 諸磯土器変遷図

掛けしたものである。黒ベタは、0%で保有する割合が多いほど網掛けが薄くなり土器のカタチが見えるような図である。50%以上保有する形類については、網掛けを外してある。この図は、視覚的に各段階・地域における深鉢のカタチに対する、出現度を捉えるために作成した⁸⁾。

群馬県域の各段階カタチ概要（表1・2・第3・5図）

1段階（諸磯a古段階）のカタチ

本段階のカタチの特色（表2）は、口縁部の70%がタイラ、ナミが30%である。口頸部は、ガイハンが82%、ナイワンが18%である。突起は、ナシが97%、トッキが3%と圧倒的に突起の付かないものが多い。胴部は、ソルが48%、フクラムが52%とほぼ同量の数字を示す。

1段階で多い形類（表1）は、O類と1類で28%程である。次に多いのが、8類・9類が12%程である。3・7・A・B・E・F類の突起を持つ形類の土器は、0%であることから、1段階の土器のカタチは、突起が無く、口縁を外反させると言う意識が強く、それに続いて波状口縁より平口縁が優位性を持っていることがわかる。胴部の膨らみについては、ほぼ半々の割合であることから、本段階においては、規制が弱いと言える。

2段階（諸磯a新段階）のカタチ

本段階のカタチの特色（表2）は、口縁部の75%がタイラ、ナミが25%である。口頸部はガイハンが95%、ナイワンが5%である。突起は、ナシが90%、トッキが10%と1段階よりやや多くなる。胴部は、ソルが62%、フクラムが38%と1段階に比べソルが優位になっている。

2段階で多い形類（表1）は、O類で50%を占める。次いで1類と9類が15%を占める。本段階では、4類・B～F類が0%である。他に5類から7類の出土割合も低い傾向を示す。このことから、本段階では、平口縁で頸部外反する形類が優勢で次いで波状口縁で、頸部外反が続き、突起や口縁内湾の形類は、少ないと言える。

3段階（諸磯b古段階）のカタチ

本段階のカタチの特色（表2）は、口縁部のタイラが80%、ナミ20%と前段階よりさらにタイラの比率が高くなっている。口頸部はガイハンが85%、ナイワン15%である。突起は、ナシが72%、トッキが28%と1・2段階より増えている。胴部はソルが64%、フクラムが36%と2段階とほぼ同じである。

3段階で多い形類（表1）は、O類で33%と最も多く、1類15%、2類11%、3類9%、8類8%、9類6%と2段階に比べ他の形類に分散する傾向にある。A類・E類が0%で、他に5類・7類・B～F類が2%以下と少なくなっている。本段階では、平口縁で頸部外反する形類が優勢で次いで波状口縁で、頸部外反が続き、突起や口縁内湾の形類は、少ないと言える。2段階に比

べ、一つの形類に集中する度合いが弱くなり、各形類に分散する傾向が見られる。

4段階（諸磯b中1段階）のカタチ

本段階のカタチの特色（表2）は、口縁部のタイラが60%、ナミが40%と3段階に比べナミの比率が高くなっている。口頸部は、ガイハンが38%、ナイワン62%になり、ガイハンよりナイワンの比率が多くなり、前段階までの状況から逆転している。突起は、ナシが47%、トッキが53%である。突起についても、前段階までとは異なりトッキの比率が多くなっている。胴部は、ソルが40%、フクラムが60%となり、胴部のカタチでも前段階と逆転した様相を示している。

4段階で多い形類（表1）は、7類が14%・F類が13%と比較的多い傾向を示すが他に、O類・1類・3類・D類も10%前後あり、本段階では各形類に分散する傾向が強くなる。A類・B類が0%で、5類・9類が3%以下と少数である。突起のある形類は、2・3・6・7・A・B・E・F類の8種類あり、その中で、ナミ・ガイハンの組み合わせの2種類は、0%でこの形類は、無かったと考えられるのに対して、他の6種類については、土器が確認されている。出土比率は、胴部のカタチがソルよりフクラムの比率が多くなっている。

5段階（諸磯b中2段階）

本段階のカタチの特色（表2）は、口縁部のタイラが59%、ナミ41%と4段階とほぼ同じ状況である。口頸部は、ガイハンが29%、ナイワンが71%なり、4段階よりさらにナイワンが増えている。突起は、ナシが48%、トッキが52%と4段階とほぼ同じ比率である。胴部のソルは42%、フクラムが58%となり、これも4段階とほぼ同様の状況である。このことから、5段階の土器は、4段階に比べ口頸部のナイワンの比率が多くなっていると言える。

5段階の形類（表1）における比率は、4段階とほぼ同様であるが、1類と3類が4段階と比べほぼ半減しているのに対して、5類と9類が数字の上では、ほぼ倍増である。4類より増えている。前者に共通するのは、口縁と胴部のカタチであり、後者に共通するのは、胴部のカタチである。突起については、4段階と同様の傾向を示している。

6段階（諸磯b新段階）

本段階のカタチの特色（表2）は、口縁部は、タイラが25%、ナミが75%と前段階までは、タイラが優勢或いは、やや多い程度であったのが本段階になると、ナミが多くなっているのが特徴である。口頸部は、ガイハンが21%、ナイワンが79%とナイワンが、前段階に比べ多くなっている。突起は、ナシが69%、トッキが31%と4、5段階に比べトッキの比率が低くなっている。胴部は、ソルが62%、フクラムが38%となっており、5段

表1 深鉢形類割合集計表

群馬県内

段階	0類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	9類	A類	B類	C類	D類	E類	F類	総数(個)
1段階	27.72	28.71	1.98	0	3.96	6.93	0.99	0	11.88	11.88	0	0	0.99	4.95	0	0	101
2段階	49.23	16.92	3.08	1.54	0	1.54	0	3.08	7.69	15.38	1.54	0	0	0	0	0	65
3段階	32.46	14.91	11.4	8.77	4.39	1.75	4.39	0.88	9.65	6.14	0	1.75	1.75	0.88	0	0.88	114
4段階	9.47	9.47	4.21	11.58	3.16	2.11	7.37	13.68	3.16	1.05	0	0	8.42	9.47	4.21	12.63	95
5段階	7.84	5.88	2.94	4.9	6.86	4.9	7.84	18.63	2.94	3.92	0	0	5.88	8.82	6.86	11.76	102
6段階	9.84	1.64	1.64	0	8.2	0	1.64	1.64	8.2	0	0	0	21.31	19.67	11.48	14.75	61
7段階	15.05	9.68	8.6	6.45	2.15	6.45	2.15	2.15	9.68	1.08	5.38	2.15	6.45	12.9	6.45	3.23	93
8段階	18	14	20	5	3	1	9	20	1	1	2	2	1	1	1	1	100
9段階	4.41	0	8.82	10.29	7.35	4.41	10.29	30.88	8.82	1.47	1.47	2.94	0	1.47	2.94	4.41	68
総計	19.4	12.02	7.38	5.63	4.26	3.38	5.01	9.89	6.88	4.63	1.13	1	4.63	6.26	3.38	5.13	799

鎗・碓氷地域

段階	0類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	9類	A類	B類	C類	D類	E類	F類	総数(個)
1段階	18.18	63.64	0	0	9.09	0	0	0	9.09	0	0	0	0	0	0	0	11
2段階	47.06	23.53	5.88	0	0	0	0	0	5.88	17.65	0	0	0	0	0	0	17
3段階	37.5	15	5	7.5	2.5	2.5	5	2.5	5	12.5	0	5	0	0	0	0	40
4段階	8	6	4	12	8	0	8	18	0	0	0	0	4	12	6	14	50
5段階	5.56	3.7	1.85	1.85	5.56	3.7	11.11	20.37	3.7	5.56	0	0	1.85	11.11	9.26	14.81	54
6段階	9.68	0	0	0	9.68	0	0	0	9.68	0	0	0	16.13	22.58	12.9	19.35	31
7段階	16.67	4.17	16.67	8.33	8.33	4.17	0	4.17	8.33	0	4.17	0	12.5	8.33	0	4.17	24
8段階	25	15	15	15	0	0	5	5	5	0	5	0	0	5	0	5	20
9段階	0	0	10	0	10	10	10	20	0	0	0	0	0	0	10	30	10

赤城山南西麓地域

段階	0類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	9類	A類	B類	C類	D類	E類	F類	総数(個)
1段階	17.86	39.29	0	0	0	3.57	3.57	0	10.71	21.43	0	0	0	3.57	0	0	28
2段階	52.38	14.29	4.76	4.76	0	4.76	0	0	14.29	0	4.76	0	0	0	0	0	21
3段階	32.61	10.87	15.22	6.52	2.17	2.17	4.35	0	15.22	2.17	0	0	4.35	2.17	0	2.17	46
4段階	11.11	20	2.22	11.11	2.22	4.44	6.67	4.44	6.67	2.22	0	0	11.11	4.44	2.22	11.11	45
5段階	14.63	7.32	4.88	4.88	7.32	2.44	2.44	19.51	2.44	7.32	0	0	9.76	4.88	2.44	9.76	41
6段階	7.69	15.38	7.69	0	0	0	0	7.69	15.38	0	0	0	23.08	0	0	23.08	13
7段階	11.76	23.53	0	0	0	17.65	0	5.88	17.65	0	5.88	0	0	0	17.65	0	17
8段階	21.74	34.78	13.04	0	8.7	0	4.35	17.39	0	0	0	0	0	0	0	0	23
9段階	6.67	0	10	13.33	0	6.67	6.67	33.33	13.33	3.33	3.33	3.33	0	0	0	0	30

前橋・伊勢崎地域

段階	0類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	9類	A類	B類	C類	D類	E類	F類	総数(個)
1段階	37.5	16.67	4.17	0	6.25	6.25	0	0	12.5	8.33	0	0	2.08	6.25	0	0	48
2段階	53.85	7.69	3.85	0	0	0	0	7.69	3.85	23.08	0	0	0	0	0	0	26
3段階	21.05	21.05	10.53	21.05	5.26	0	5.26	0	10.53	5.26	0	0	0	0	0	0	19
4段階	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	100	0	0	0	1
5段階	50	0	25	0	0	0	25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
6段階	22.22	33.33	0	0	11.11	0	11.11	11.11	0	0	0	0	0	11.11	0	0	9
7段階	66.67	0	0	33.33	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
8段階	4.17	20.83	12.5	8.33	12.5	0	4.17	16.67	4.17	4.17	4.17	4.17	0	0	4.17	0	24
9段階	11.11	0	11.11	11.11	11.11	0	11.11	16.67	11.11	0	5.56	0	0	5.56	5.56	0	18

利根・片品地域

段階	0類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	9類	A類	B類	C類	D類	E類	F類	総数(個)
1段階	10	40	0	0	0	20	0	0	10	10	0	0	0	10	0	0	10
2段階	0	66.67	0	0	0	0	0	0	0	33.33	0	0	0	0	0	0	3
3段階	28.57	28.57	14.29	0	28.57	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
4段階	20	0	20	20	0	0	0	20	0	0	0	0	0	20	0	0	5
5段階	0	0	0	20	20	20	0	0	0	0	0	0	20	0	20	0	5
6段階	0	50	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	50	0	0	2
7段階	3.57	7.14	14.29	7.14	0	0	7.14	0	3.57	0	10.71	3.57	10.71	17.86	10.71	3.57	28
8段階	0	8.7	30.43	0	0	0	21.74	26.09	0	4.35	0	8.7	0	0	0	0	23
9段階	0	0	0	0	16.67	0	50	33.33	0	0	0	0	0	0	0	0	6

榛名地域

段階	0類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	9類	A類	B類	C類	D類	E類	F類	総数(個)
1段階	33.33	16.67	0	0	0	16.67	0	0	16.67	16.67	0	0	0	0	0	0	6
3段階	33.33	33.33	33.33	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
4段階	0	0	0	0	0	0	0	100	0	0	0	0	0	0	0	0	1
5段階	16.67	16.67	0	16.67	0	16.67	0	0	0	0	0	0	0	16.67	0	16.67	6
6段階	0	0	0	5.88	11.76	0	0	0	5.88	0	0	0	29.41	23.53	17.65	5.88	17
7段階	22.73	9.09	0	4.55	0	9.09	0	0	13.64	4.55	4.55	4.55	0	22.73	0	4.55	22
8段階	26.32	10.53	15.79	0	0	5.26	5.26	26.32	0	0	5.26	0	5.26	0	0	0	19
9段階	0	0	0	14.29	14.29	0	0	57.14	0	0	0	14.29	0	0	0	0	7

表2 深鉢形類割合集計表

口縁形状割合

段階	0類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	小計(個)	割合(%)	8類	9類	A類	B類	C類	D類	E類	F類	小計(個)	割合(%)	総計(個)
1段階	28	29	2	0	4	7	1	0	71	70.3	12	12	0	0	1	5	0	0	30	29.7	101
2段階	32	11	2	1	0	1	0	2	49	75.38	5	10	1	0	0	0	0	0	16	24.62	65
3段階	37	17	13	10	5	2	5	1	90	78.95	11	7	0	2	2	1	0	1	24	21.05	114
4段階	9	9	4	11	3	2	7	13	58	61.05	3	1	0	0	8	9	4	12	37	38.95	95
5段階	8	6	3	5	7	5	8	19	61	59.8	3	4	0	0	6	9	7	12	41	40.2	102
6段階	6	1	1	0	5	0	1	1	15	24.59	5	0	0	0	13	12	7	9	46	75.41	61
7段階	14	9	8	6	2	6	2	2	49	52.69	9	1	5	2	6	12	6	3	44	47.31	93
8段階	18	14	20	5	3	1	9	20	90	90	1	1	2	2	1	1	1	1	10	10	100
9段階	3	0	6	7	5	3	7	21	52	76.47	6	1	1	2	0	1	2	3	16	23.53	68
総計	155	96	59	45	34	27	40	79	535	66.96	55	37	9	8	37	50	27	41	264	33.04	799

口頸部形状割合

段階	0類	1類	2類	3類	8類	9類	A類	B類	小計(個)	割合(%)	4類	5類	6類	7類	C類	D類	E類	F類	小計(個)	割合(%)	総計(個)
1段階	28	29	2	0	12	12	0	0	83	82.18	4	7	1	0	1	5	0	0	18	17.82	101
2段階	32	11	2	1	5	10	1	0	62	95.38	0	1	0	2	0	0	0	0	3	4.62	65
3段階	37	17	13	10	11	7	0	2	97	85.09	5	2	5	1	2	1	0	1	17	14.91	114
4段階	9	9	4	11	3	1	0	0	37	38.95	3	2	7	13	8	9	4	12	58	61.05	95
5段階	8	6	3	5	3	4	0	0	29	28.43	7	5	8	19	6	9	7	12	73	71.57	102
6段階	6	1	1	0	5	0	0	0	13	21.31	5	0	1	1	13	12	7	9	48	78.69	61
7段階	14	9	8	6	9	1	5	2	54	58.06	2	6	2	2	6	12	6	3	39	41.94	93
8段階	18	14	20	5	1	1	2	2	63	63	3	1	9	20	1	1	1	1	37	37	100
9段階	3	0	6	7	6	1	1	2	26	38.24	5	3	7	21	0	1	2	3	42	61.76	68
総計	155	96	59	45	55	37	9	8	464	58.07	34	27	40	79	37	50	27	41	335	41.93	799

突起形状割合

段階	0類	1類	4類	5類	8類	9類	C類	D類	小計(個)	割合(%)	2類	3類	6類	7類	A類	B類	E類	F類	小計(個)	割合(%)	総計(個)
1段階	28	29	4	7	12	12	1	5	98	97.03	2	0	1	0	0	0	0	0	3	2.97	101
2段階	32	11	0	1	5	10	0	0	59	90.77	2	1	0	2	1	0	0	0	6	9.23	65
3段階	37	17	5	2	11	7	2	1	82	71.93	13	10	5	1	0	2	0	1	32	28.07	114
4段階	9	9	3	2	3	1	8	9	44	46.32	4	11	7	13	0	0	4	12	51	53.68	95
5段階	8	6	7	5	3	4	6	9	48	47.06	3	5	8	19	0	0	7	12	54	52.94	102
6段階	6	1	5	0	5	0	13	12	42	68.85	1	0	1	1	0	0	7	9	19	31.15	61
7段階	14	9	2	6	9	1	6	12	59	63.44	8	6	2	2	5	2	6	3	34	36.56	93
8段階	18	14	3	1	1	1	1	1	40	40	20	5	9	20	2	2	1	1	60	60	100
9段階	3	0	5	3	6	1	0	1	19	27.94	6	7	7	21	1	2	2	3	49	72.06	68
総計	155	96	34	27	55	37	37	50	491	61.45	59	45	40	79	9	8	27	41	308	38.55	799

胴部形状割合

段階	0類	2類	4類	6類	8類	A類	C類	E類	小計(個)	割合(%)	1類	3類	5類	7類	9類	B類	D類	F類	小計(個)	割合(%)	総計(個)
1段階	28	2	4	1	12	0	1	0	48	47.52	29	0	7	0	12	0	5	0	53	52.48	101
2段階	32	2	0	0	5	1	0	0	40	61.54	11	1	1	2	10	0	0	0	25	38.46	65
3段階	37	13	5	5	11	0	2	0	73	64.04	17	10	2	1	7	2	1	1	41	35.96	114
4段階	9	4	3	7	3	0	8	4	38	40	9	11	2	13	1	0	9	12	57	60	95
5段階	8	3	7	8	3	0	6	7	42	41.18	6	5	5	19	4	0	9	12	60	58.82	102
6段階	6	1	5	1	5	0	13	7	38	62.3	1	0	0	1	0	0	12	9	23	37.7	61
7段階	14	8	2	2	9	5	6	6	52	55.91	9	6	6	2	1	2	12	3	41	44.09	93
8段階	18	20	3	9	1	2	1	1	55	55	14	5	1	20	1	2	1	1	45	45	100
9段階	3	6	5	7	6	1	0	2	30	44.12	0	7	3	21	1	2	1	3	38	55.88	68
総計	155	59	34	40	55	9	37	27	416	52.07	96	45	27	79	37	8	50	41	383	47.93	799

東京西部

段階	0類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	9類	A類	B類	C類	D類	E類	F類	総計(個)
1段階	53.13	31.25	0	0	0	0	0	0	9.38	3.13	0	3.13	3.13	0	0	0	32
2段階	73.77	14.75	3.28	0	2.46	0	0	0	4.92	0	0	0.82	0.82	0	0	0	122
3段階	71.93	11.4	1.75	5.26	1.75	0	0	0	4.39	1.75	0	1.75	1.75	0	0	0	114
4段階	5.26	5.26	5.26	10.53	31.58	0	0	0	0	0	0	21.05	21.05	0	21.05	0	19
総計	66.2	14.63	2.44	2.79	3.83	0	0	0	4.88	1.05	0	2.79	2.79	0	1.39	0	287

東京東部

段階	0類	1類	2類	3類	4類	5類	6類	7類	8類	9類	A類	B類	C類	D類	E類	F類	総計(個)
1段階	65.63	18.75	3.13	0	3.13	0	0	0	3.13	3.13	0	0	3.13	0	0	0	32
2段階	57.89	21.05	0	0	2.63	0	0	0	13.16	2.63	0	0	2.63	0	0	0	38
3段階	66.67	2.56	5.13	0	0	2.56	0	0	20.51	0	0	0	0	2.56	0	0	39
4段階	14.29	0	0	0	42.86	7.14	0	21.43	0	0	0	0	14.29	0	0	0	14
総計	57.72	12.2	2.44	0	6.5	1.63	0	2.44	11.38	1.63	0	0	3.25	0.81	0	0	123

階とは逆転してソルが多くなっている。

6段階の形類（表1）における比率は、C類・D類が20%前後と多く、次いで、F類の15%、E類の12%あり、これらに共通するのは、口縁部ナミ、頸部ナイワンである。口縁部タイラは、O類・4類が比較的多いが、その他は少ない。口縁部ナミは、数量的には75%と多いのであるが、9類・A類・B類が0%となっており、口縁部がナミになるカタチでも形類が偏る傾向を示している。

7段階（諸磯b～c段階）

本段階のカタチの特色（表2）は、口縁部は、タイラが52%、ナミが48%とほぼ同じ比率になっている。口頸部は、ガイハンが58%、ナイワンが42%と6段階に比べ再びガイハンが多くなる。突起は、ナシ63%で、トッキが37%と6段階より僅かであるが、トッキの割合が多くなっている。胴部は、ソルが56%、フクラムが44%と6段階に比べ、フクラムが多くなっている。

7段階の形類（表1）では、多寡の差はあるがO類からF類までである。その中で、O類が14%、D類が13%と比較的多く、1類・8類が10%、2類が9%、3類・C類が7%と口縁部タイラで、口頸部ガイハンの形類が比較的多く、口縁部タイラで、口頸部ナイワン形類が少なくなっている。また、8類と9類は、胴部のソルとフクラムの違いであるが、胴部カタチの違いで、比率が大きく異なる点もある。

8段階（諸磯c古段階）

本段階のカタチの特色（表2）は、口縁部では、タイラが90%、ナミが10%とそれまでの段階に比べナミが大幅に少なくなっている。口頸部は、ガイハンが61%、ナイワンが39%とほぼ7段階と同様の比率である。突起は、ナシが38%、トッキが62%と7段階と逆転する。胴部は、ソルが54%、フクラムが46%で、7段階とはほぼ同じ状況である。

8段階の形類（表1）における比率は、7類が21%と多く、次いで、2類20%、O類16%、1類15%、6類9%となっている。9類が0%の他、口縁部がナミであるものは、2%以下の比率で出土量が少なくなっているのが特徴的である。

9段階（諸磯c新段階）

本段階のカタチの特色（表2）は、口縁部タイラ77%、ナミ23%である。ナミが8段階に比べ多くなっている。口頸部は、ガイハンが36%、ナイワンが63%とナイワンの比率が8段階とは逆に高くなっている。突起は、ナシが26%、トッキが74%と8段階以前のものに比べ本段階が一番多い。胴部は、ソルが42%、フクラムが58%と8段階とは逆転している。

9段階の形類（表1）における比率は、3類・6類が11%と比較的多く、次いで2類9%、4・8類が8%

である。1類・C類は0%、9・A・D類が2%以下と少ない。口縁部タイラが77%ありながら、1類が0%であることは、他のカタチと組み合わせる中で、使われない形類が存在するということである。

形類別の特徴

各形類の割合を示したのが表1である。

群馬県内全域の割合は、O類19.4%、1類12%、2類7.4%、3類5.6%、4類4.2%、5類3.4%、6類5%、7類9.8%、8類6.9%、9類4.6%、A類1%、B類1%、C類4.6%、D類6.2%、E類3.4%、F類5%である。

O類は、16分類の中でも最も多く見られる形類である。特に、1～3段階に多く見られるが、4段階になると極端に少なくなり、7・8段階で若干増えるものの、9段階では、ほとんど無くなる形類である。1類は、1段階で28.7%を占め、次いで2段階で16.9%と諸磯式の古い段階で多く見られるが、4段階、5・6段階と少なく8段階で14%と多くなり、9段階では0%となる。

2類は、8段階で20%と多く、次いで3段階11.4%、7段階の8.6%、9段階の8.8%であるが、4～6段階では、比率が減少し、6段階では、1.6%となって諸磯式の新しい段階に比較的多く見られる。3類は、3・4段階に多く、1段階と6段階では、0%となっている。9段階で10%となっている。

4類は、6段階で8%と比較的多いが、2段階で0%で、他は平均して少ない。5類は、4種同様に平均しており、集中する形類はない。

6類は、4・5・8・9段階で7～10%あるが、1・2・6段階では、2%以下と少なくなっている。7類は、4・5段階で13～18%、8・9段階で20%以上あり、1段階で0%、2・3・6・7段階で3%以下となっている。諸磯b中段階と諸磯c段階に多い形類である。

8類は、1段階で11.8%、3・7段階で9.6%、2・9段階で8%あり、他の段階では、少なくなっている。9類は、1・2段階で10%以上であったが、3段階以降少なくなっている。諸磯a段階に多く、その後減少していく形類である。

A類は、7段階で5%、8段階で2%、2・9段階で2%あり、他の段階では、0%と段階により偏りが見られる。B類は、7～9段階で2%、3段階で1.7%の他は、0%でA類同様に段階により偏りが見られる。

C類は、4～7段階に多くあり、特に6段階は、21%ある、諸磯式の古段階と新段階では、この形類が少なくなる傾向にある。D類は、4～7段階に多くあり、諸磯式古段階や新段階では、0%となっている。

E類は、4～7段階に多く集まり、1～3段階では、0%である。F類は、4～6段階に多くあり、1・2段階で0%である。

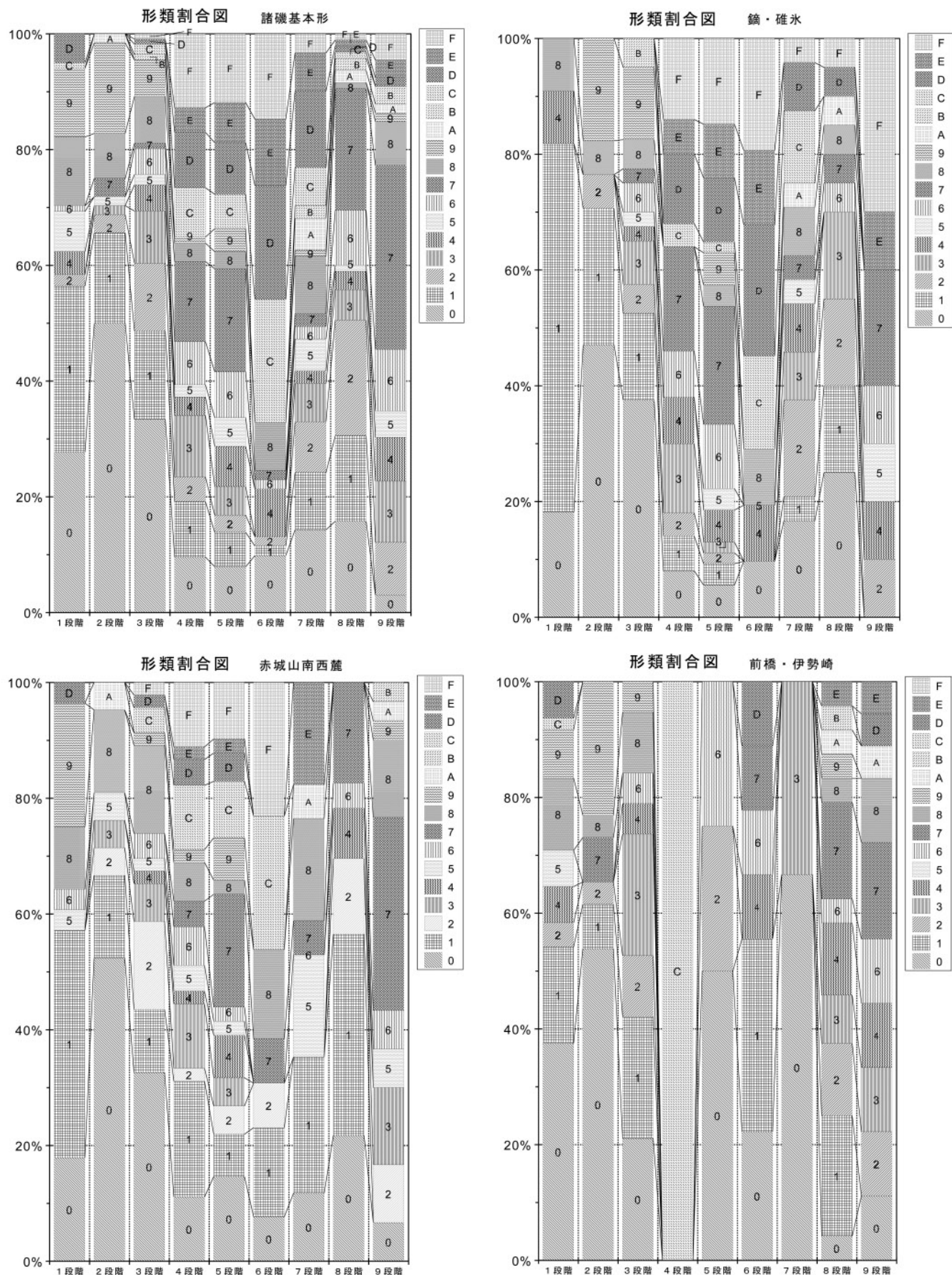


図3 形類別割合図 (1)

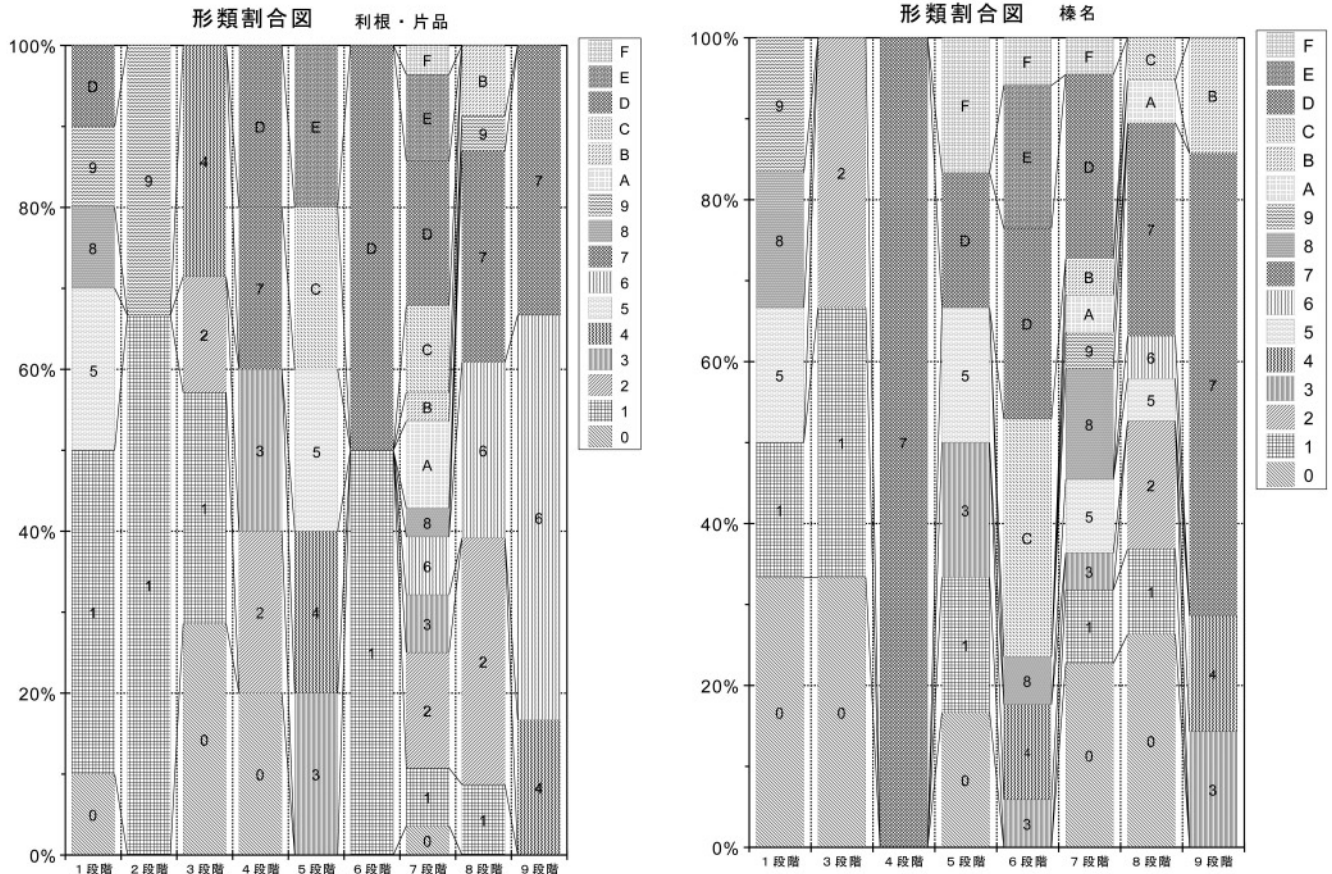


図4 形類別割合図 (2)

5. 地域の概要

前項では、群馬県全体について、段階別に形類の特徴を検討した。この形類が、地域によって差が見られるのか検討してみたい。

群馬県内の地域を鎗川・碓氷川流域、榛名山麓、赤城山南西麓、前橋・伊勢崎台地、利根・片品地域、吾妻地域、渡瀬地域に分けた。このうち、吾妻、渡瀬地域では、良好な資料が報告されていないため、検討地域から省いた。また、県内全域に比べ各段階とも標本個体数が少なくなることから、比率の振幅が極端になる部分もある。

現在のところ群馬以外の地域についても集計をしているところであるが、東京都西部・東部について、まとめていることから、比較のため資料を掲載した。

(1) 鎗・碓氷地域 (表1・図3・6)

本地域は、妙義山の麓から鎗川・碓氷川流域をまとめた。群馬県西部地域である。藤岡市、富岡市、多野郡、安中市・高崎市南西部の範囲である。

口縁部の出土状況は、タイラが多くナミが少ない傾向は、県内全域とほぼ同じである。口頸部のガイハンとナイワンの出土傾向も、ほぼ同じである。突起のナシとトッキの出土傾向は、県内全域とほぼ同様の傾向を示しているが、8段階でほぼ同数の比率になり、トッキを持た

ない土器が目立つ。胴部のソルとフクラムの比率は、ソルが2・3・6・7・8段階で多くなっており、県内全域と同様の傾向を示している。

本地域では、各段階の形類で欠落しているものが多い見られる。1段階では、2・3・5～7・9・A～F形類が0%であった。特に、県内全域では、12%ある9類や7%の5類、5%のD類が本地域では、0%であることから、本地域では、胴部のフクラム形類が欠落していると考えられる。本段階では、1類が64%と突出しているのも特徴的である。2段階では、3～7、A～F類が0%であった。0類が47%、1類が24%、9類が18%と出現割合が多い。

3段階では、A・C～F類が0%であった。県内全域と比較するとC・D・Fが欠落しているが、県内全域でも出土量が少ないことから、県内全域とほぼ同様の傾向を示していると考えられる。本段階でも、0類の出現割合が多い。4段階は、5・8～B類が0%であった。県内全域と比較すると5・8・9類が欠落している。本段階では、形類が分散する傾向にあるが、6・7類が比較的多くトッキを持つ形類が特徴となっている。5段階は、A・B類が0%で、県内全域と同様の出現傾向であった。本段階では、7類が20%と比較的多いのが特徴的であ

る。

6段階では、1・3・5・7・9～B類が0%であった。県内全域と比較すると1・2・6・7類が欠落しているが、3・5類も県内全域で出現総量が少なくいことから、県内全域の出土傾向と同様の出現傾向にあると言える。本段階では、D類が22%と比較的多くなっている。7段階では、6・9・B・E類が0%であった。県内全域と比較すると、本地域も同様の出現状況である。本段階も形類が分散する傾向にあるが、O・2類が17%と比較的多い。

8段階では、4・5・9・B・C・E類が0%であった。県内と比較すると各類の出現状況は、同様の増減を示している。本段階では、O類が25%と多い。9段階では、O・1・3・8～D類が0%と欠落している類が多くある。県内全域と比較すると、同様の出現状況を示すが、3類の出現割合が0%と大きく異なっている。本段階では、F類が30%と出現割合が多くなっているのが特徴である。

(2) 赤城山南西麓地域 (表1・図3・7)

本地域は、赤城山と子持山で作る谷から南の利根川左岸、赤城山の南西部地域である。渋川市の東部(旧赤城村・北橋村)前橋市北東部(旧富士見村・大胡町・粕川村・宮城村)である。群馬県中央部東側地域になる。

口縁部のタイラとナミの割合は、県内全域とほぼ同じ比率である。口頸部のガイハンとナイワンでは、4段階と9段階で県内全域とは異なり、総じてガイハンの割合が高い。突起は、ナシが4・5段階で高い割合を示している。胴部は、ソルとフクラムがほぼ同数で、県内全域と同様の傾向を示している。

本地域での各類の出土状況は、1段階では、2・4・7・A～C・E・Fが0%であった。県内全域と比較しても2・4・Cが欠落している。また、O類9類の出現割合も逆転している。本段階で多い形類は、1類が39%、次いで9類が21%である。2段階は、4・6・7・9・B～F類が0%であった。県内全域と比較すると7類と9類が欠落している。特に9類は、県内全域で16%有るのに対してその差は大きくなっている。本段階で多い形類は、O類で52%あり突出している。

3段階では、7・A・B・E類が0%である。県内全域と比較すると、7とB類が欠落しているが、県内全域でも出土量が少ない。本段階では、O類が33%で最も多い。4段階は、A・B類が0%で、県内全域と同様である。本段階では、1類の出現割合20%と比較的多くなっている。5段階では、A・B類が0%で欠落しており、県内全域と同様である。本段階で多い形類は、7類であるが20%で他のトッキを持つ形類も多くなっている。

6段階では、3・5・9～B・D・E類と欠落しているものが多く見られる。県内全域でも本段階の欠落は多

いが、4・D・E類は、県内での出現数がまとまっているのに対して、本地域では欠落している。本段階で多い形類は、C・F類である。7段階では、2・4・6・9・B～D・F類が欠落している。県内全域では、出現割合が少ないものもあるが、すべての形類があることから、地域によって、所有する形類に差があることが分かる。本段階では、1類が24%と多い。

8段階では、所有する形類が少なく、3・5類と口縁部ナミの8～F類すべてが0%である。県内全域では、所有するしている形類が多いのと対照的である。本段階で多く所有している形類は、1類の35%である。次いでO類、7類となっている。9段階では、前段階より所有する形類が多くなるが、2・4・C～F類が0%である。県内全域と比較すると4・D～F類が欠落している。本段階で多く所有している形類は、7類の33%である。
(3) 前橋・伊勢崎地域 (表1・図3・8)

本地域は、赤城山南麓から一段下がった地域で、利根川の東から大間々扇状地西側の前橋・伊勢崎地域をまとめた。群馬県東南部地域である。

本地域の口縁部タイラとナミの関係は、1段階で70%と30%とほぼ県内全域とほぼ同じ内容である。4・5・7段階は、資料が少ないことから県内全域と異なるが、ほぼ出土傾向は県内全域と重なる。口頸部のナイワンとガイハンについても口縁部と同様の傾向を示す。突起については、4段階でナシが多くなっている他は、県内全域と同様の傾向である。胴部は、1・4・5・6・8・9段階で、県内全域と異なった傾向である。

1段階では、3・6・7・A・B・E類・F欄が0%で、欠落している形類は、県内全域と6類以外同様である。本段階で多く所有している形類は、O類で38%である。2段階は、所有する形類がさらに少なくなり、3・6・A～F類が0%である。県内全域では、3・6類が0～2%未満で少なく、本地域と同様の傾向を示している。本段階で多く所有している形類は、O段階で54%である。

3段階では、5・7・A～F類が0%である。県内全域では、本段階の形類は比較的多く所有しているが、本地域では、欠落している形類が多い。本段階で多く所有している形類は、O・1類の21%である。4・5段階は、本地域での検出量が少いため、省略する。

6段階も検出量が少なく、県内全域と異なる状況を示している。県内全域では、口縁部ナミが多いのに対して、本地域では、タイラのO・1類が多い。7段階の検出量も3点と少いため、省略する。

8段階は、5・C・D・F類が0%で、県内全域と比較すると5類が欠落しているが、県内全域にない9類がある。本段階で多く所有している形類は、1・7類である。9段階は1・5・9・B・C・F類が0%である。

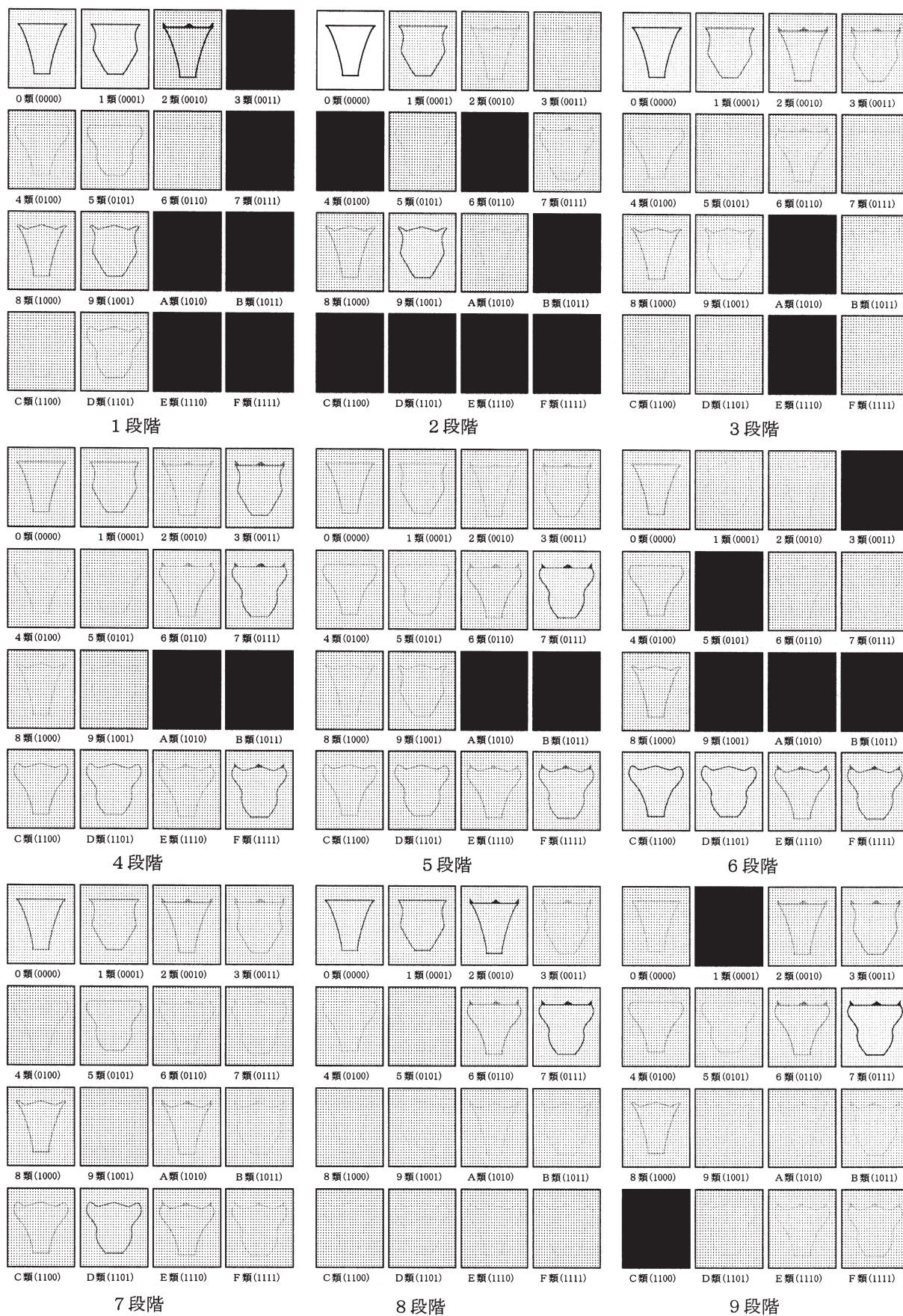


図5 群馬県全域段階別透過図

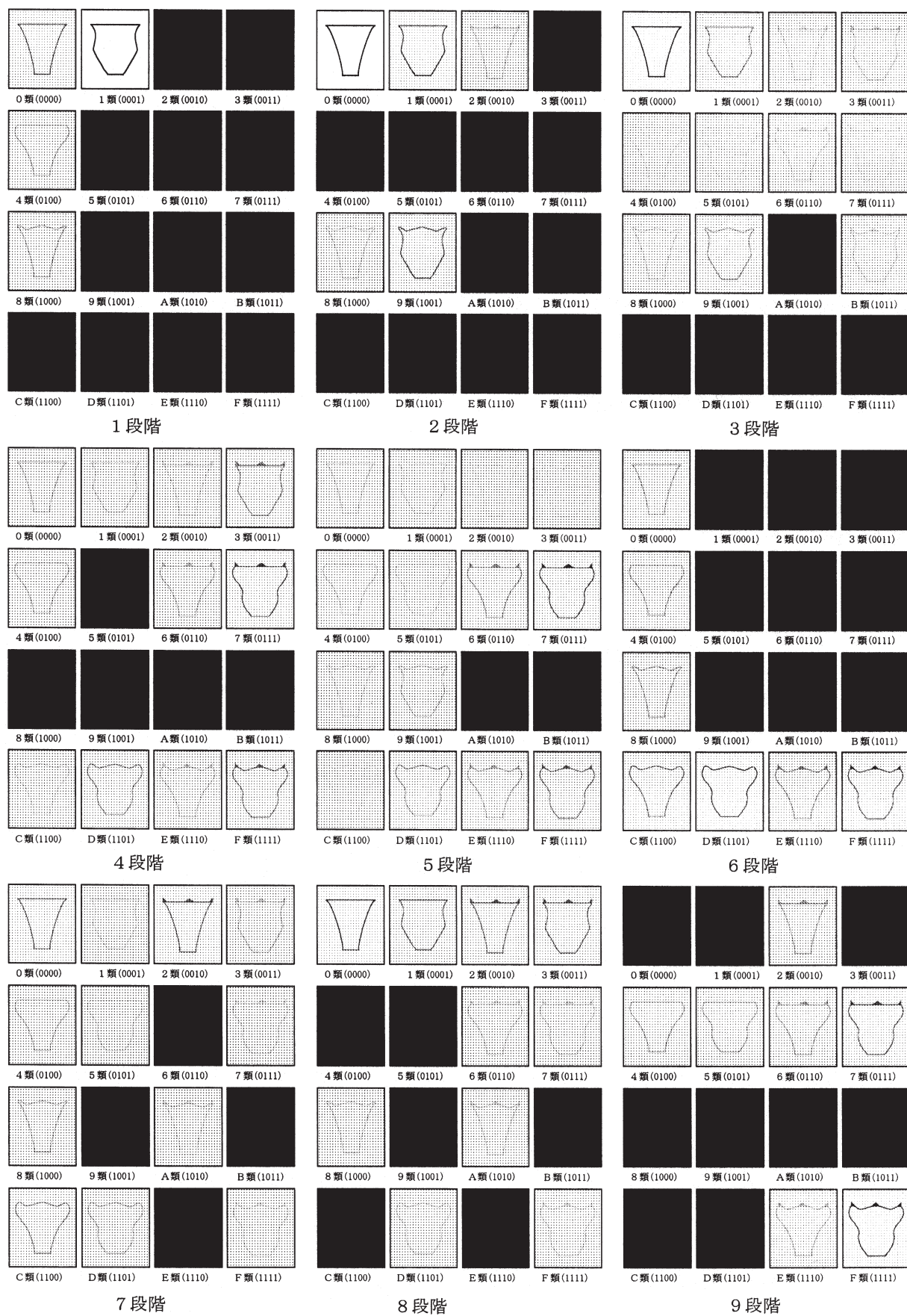


図6 鏝・碓水地域段階別透過図

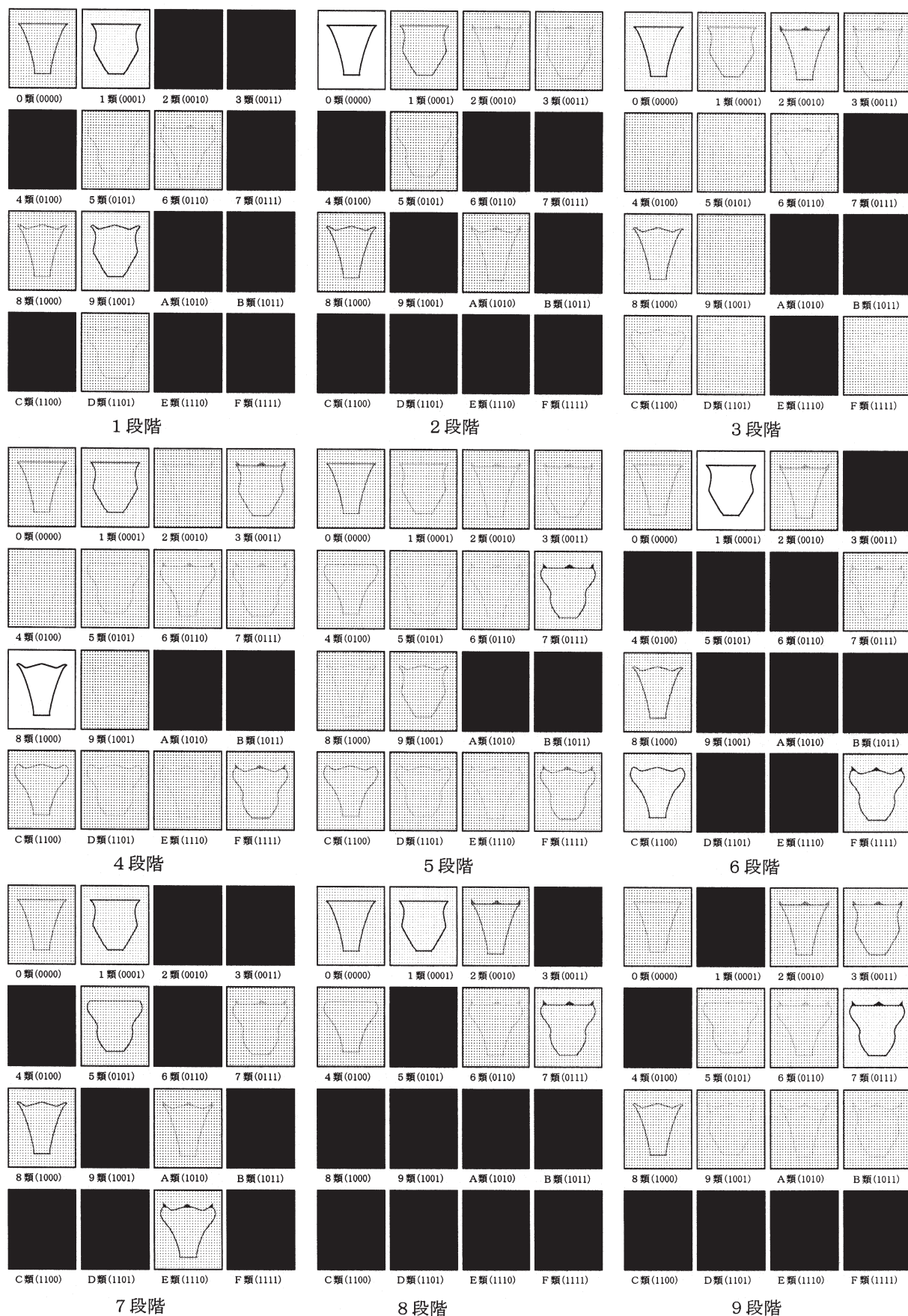
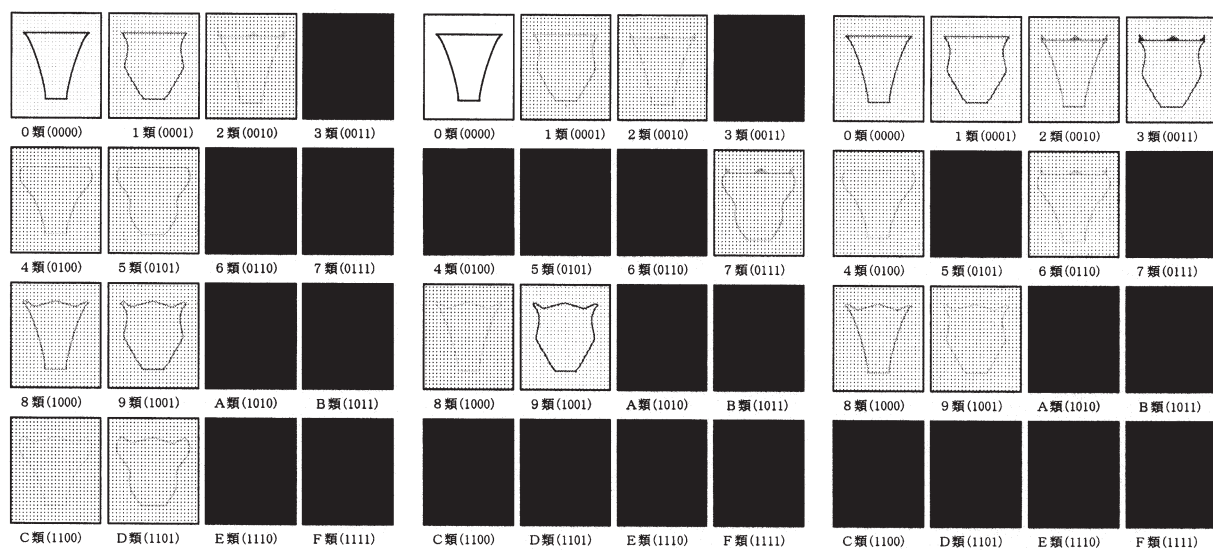


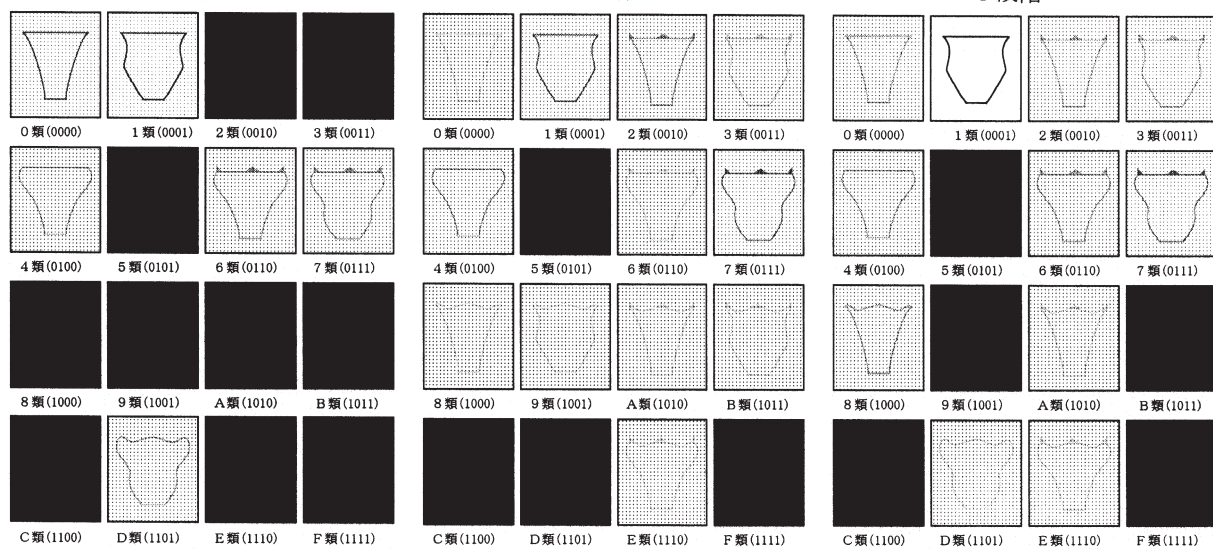
図7 赤城山南西麓地域段階別透過図



1段階

2段階

3段階

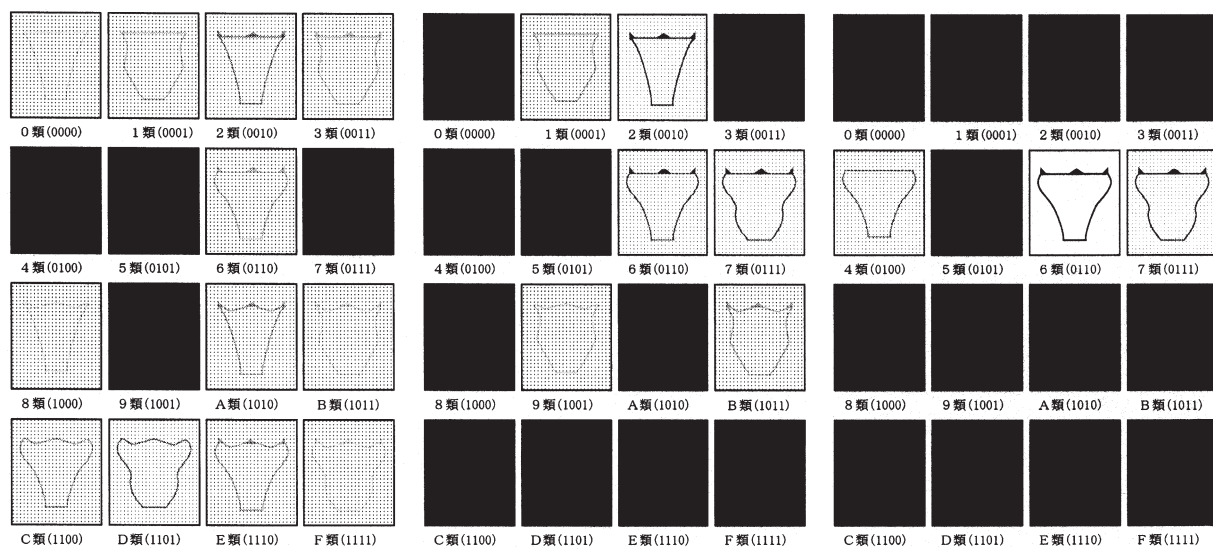


6段階

8段階

9段階

図8 前橋・伊勢崎地域段階別透過図



7段階

8段階

9段階

図8 利根・沼田地区7～9段階別透過図

県内全域と比較すると5・9・B・F類が欠落している。本段階で多く所有している形類は、7段階であるが、17%と低い割合である。8段階に多くあった1類が見られなくなっている。

(4) 利根・片品地域 (表1・図4・9)

本地域は、赤城山と子持山を結ぶ線の北側で、利根川と片品川流域の地域である。沼田市、利根郡みなかみ町・昭和村の群馬県北東部である。

本地域での遺物検出量は、榛名山麓同様に少ないため、欠落している形類も多いが、検出された形類で各段階を県内全域と比較する。口縁部は、7段階で県内全域と異なる様相を示す。口頸部は、4段階、6段階、9段階でガイハンとナイワンの比率が県内全域と逆になっている。突起は5段階でナシが多くなり、県内全域とは異なっているが他の段階では、県内全域と同様の傾向を示している。胴部は、5段階でソルとフクラムの比率が県内全域と逆転する。

1段階では、1類が40%と最も多く、次いで5類が20%で、0・8・9・D類を所有する。県内全域では、0・1類が多いが本地域では、0類が少ない。2段階は、1類が67%と多く、県内全域とは異なる。

3段階では、0・1・4類と分散している。4・5段階は、県内全域でも集中する形類が無く分散しているが、本地域でも同様の傾向にある。

6段階は、検出量が少なく、口縁部タイラとナミに分かれるが、県内全域でも集中する形類が無く、分散している。7段階は、4・5・9類が欠落している。本段階でも集中する形類が見られず、県内全域と同様の傾向を示している。

8段階は、2類が30%、7類が26%、6類が22%とほぼ3つの形類にまとまっている。9段階は、6・7類に集中している。

(5) 榛名地域 (表1・図3・10)

本地域は、赤城山と子持山の間、利根川右岸から榛名山麓一帯の地域で、渋川市西部、旧子持村、箕郷町の群馬県中央西側地域である。

本地域での遺物検出量は、少ないため、欠落している形類も多いが、検出された形類で各段階を県内全域と比較する。本地域での口縁部タイラとナミの関係は、6・7段階でタイラの割合が減少するなど全体の傾向は、県内全域と同様であった。口頸部は、1、3段階で県内全域とほぼ同様の比率であるが、3段階以降は異なる様相を示している。突起は、5段階でナシの比率が多く、県内全域とは、異なる様相を示している。胴部は、1～8段階では、あまり変わらないが、9段階でフクラムが多くなる。

1段階では、2～4、6、7、A～F類が欠落している。0類が33%と多く、利根川を挟んで対岸になる赤城南西地域とは対照的である。他に1・5・8・9類を所有する。

3段階は、0～2類が見られ、それぞれ同率であった。4段階は、7類の1点のみの検出である。5段階は、検出された形類にほぼ均等に見られた。

6段階は、C類が29%、D類が24%と多く見られ、県内全域とほぼ同様の傾向を示している。7段階は、0類とD類が23%と、まとまっており、6段階と同じく、県内全域と同様の傾向を示している。

8段階も0類と7類で26%あり、県内全域と同様で

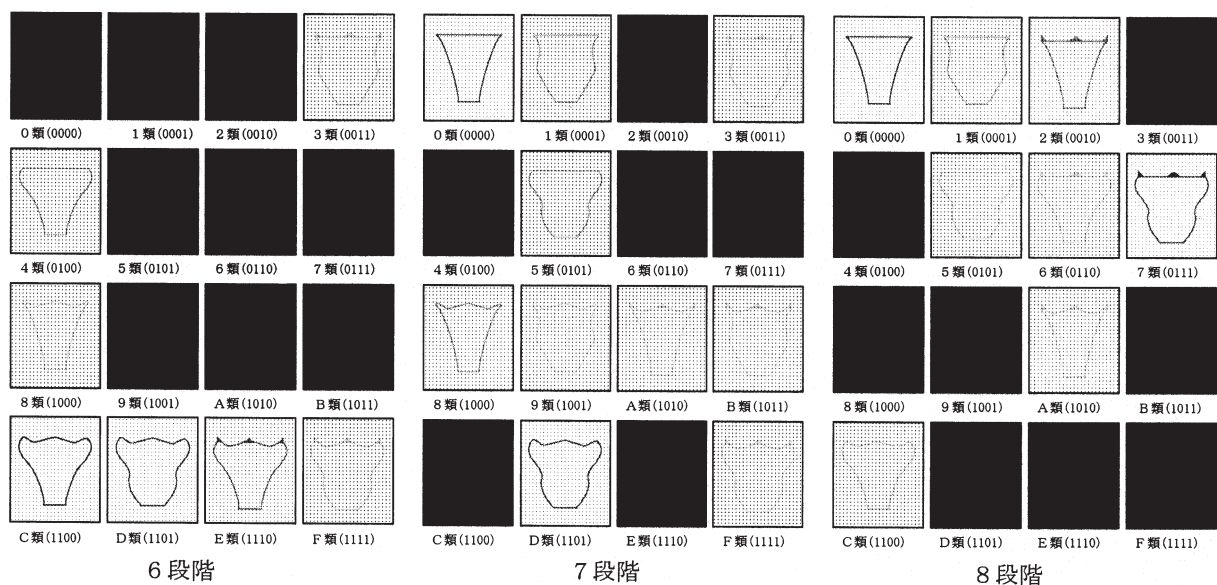


図9 榛名地区6～7段階別透過図

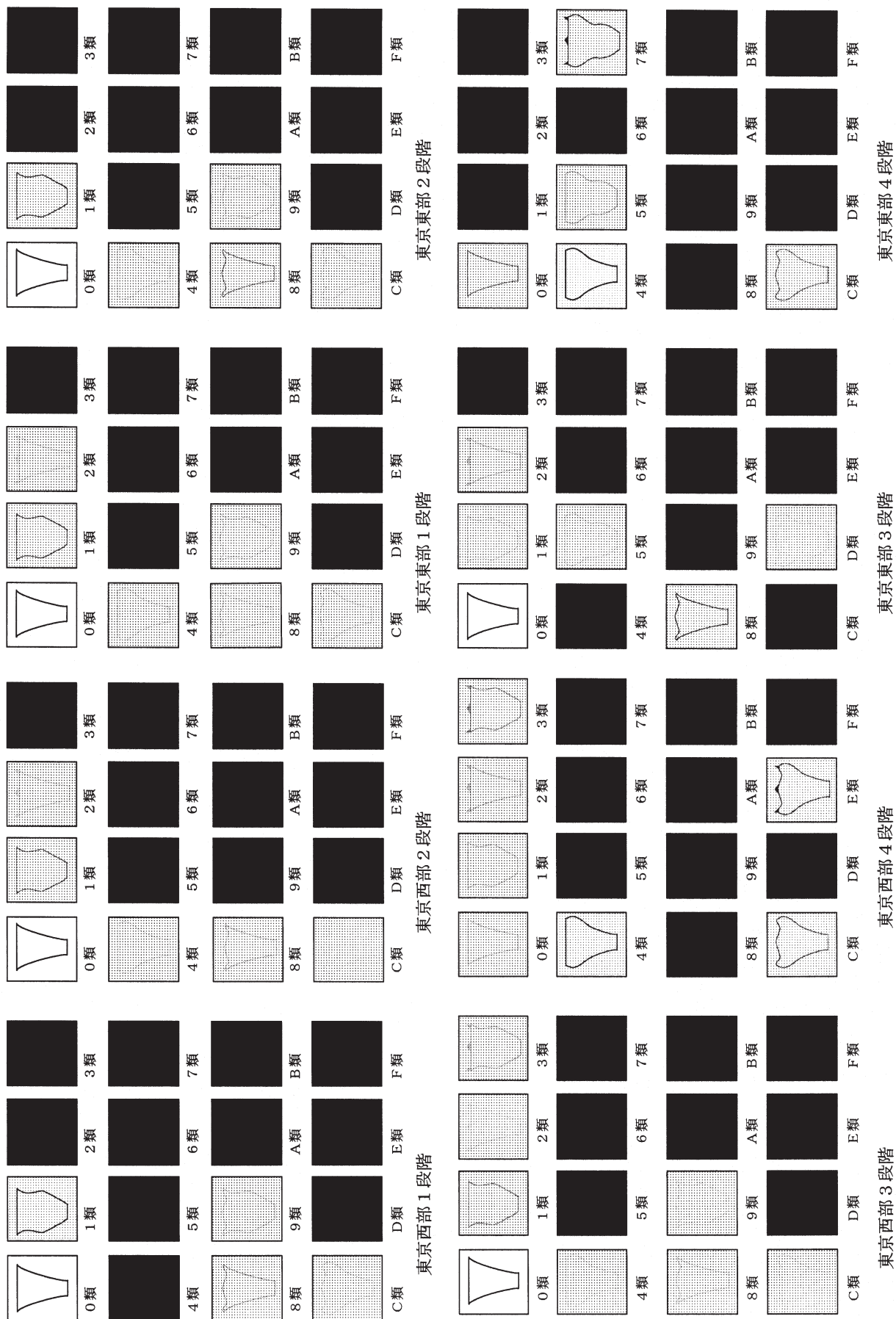


図10 東京西部・東部段階別形類透過図

ある。9段階は、県内全域と同じく7類が最も多く57%ある。

(6) 東京西部と東部地域との比較 (表2・図11)

東京西部地域は、多摩ニュータウンを中心に多摩市・八王子市・町田市・あきる野市などの丘陵部にある遺跡報告書からデータ化した。東部地域は、区内にある遺跡報告書からデータ化したものである。両地域で比較的資料のまとまっている、諸磯1段階から4段階について検討してみたい。

口縁部のタイラとナミの関係では、両地域とも1段階～3段階にかけては、タイラが優勢であり、ナミが少ない。頸部のガイハンとナイワンの関係でも、1段階～3段階では、ガイハンが優勢でナイワンが少なくなっている。4段階になると、口縁部ナミと頸部ナイワンが目立つようになる。突起の有るものも全体に少なく、4段階に見られるようになる。

1段階は、東京西部は、O類が53%・1類が31%とほとんどを占めていた。その他の形類では、8類が9%程と若干多くなっている他、9・B・C類が見られた。東京東部では、O類が65%、1類が18%とこの二つで大半を占めていた。そのほかに2・3・7・9・C類が若干出土している。西部・東部ともこの段階では、O・1類が主体となっている。

2段階は、西部でO類が73%をと大半を占め、それに次いで1類が14%となっている。東部では、O類が57%、1類が21%となっており、この段階でもO・1類が大半を占めている。その中で、8類は両方の地域でも3番目に多い形類となっている。

3段階は、1・2段階に比べ出現する形類が多くなっている。西部では、O類が71%と多く、次に1類の11%である。その他の形類は少ないが、2段階の6種類から8種類と増加した。東部では、O類が66%と変わらず多いが、7類が20%と増えている点に西部との違いが見られる。

4段階は、現在のところ資料数が少ないため、今後の資料の増加により変動すると思われるが、西部では、4・C・E類の口縁内湾形の形類が目立つようになる。東部でも同様に、4・6・C類の内湾形が目立っている。

総じて東京東・西部ではO類が1類に対して優位性を持っている。群馬地域では、これほどの違いはみられなかった。

6. まとめ

諸磯様式深鉢のカタチを4つの項目から16種類に分け、集成し、その出土比率を編年の段階・地域についてまとめた。その結果についてまとめてみたい。

① 諸磯a式の1段階では、鑄・碓氷地域や赤城南西麓では、1類の口縁ガイハンで胴部のフクラムカタチがO

類より多い傾向を示すのに対して、東京西部・東部では、O類が多くなっている。2段階になると群馬の各地域や東京でもO類が多くなっている。

また、東京西部・東部や鑄・碓氷では、出現する形類がO類・1類を主体として限定的であるのに対して、赤城南西麓地域や前橋・伊勢崎地域ではO類・1類以外にも8類・9類などその他の形類も目立つものがある。

② 3～6段階では、鑄・碓氷地域と赤城南西麓において保有する形類が多くなっている。土器の資料数が多くなると形類も当然多くなると思われるが、1・2段階で資料数の多い東京西部・東部や、鑄・碓氷地域では形類が限定的で少ない。このことからこの3～6段階では、深鉢に対する形式分化が起り、結果として形類の種類が増えたと考えられる。

③ 7～9段階は、諸磯b式から諸磯c式の段階である。群馬県全体では、7段階は、全種類の形類がみられるが、鑄・碓氷地域や利根・沼田地域ではO～3類やC・D類が目立つ。これに対して、赤城南西麓地域では、2・3類のトッキを持つ形類やC・D類のナミ・ナイワンの形類を持たない。8段階では、赤城南西麓地域では、O～2・4・6・7類と口縁タイラ系統のものが主体となっているのに対して、鑄・碓氷地域では、O～3・6～8・A・D・F類と口縁ナミの波状口縁が増え、所有する形類も多くなっている。9段階は、赤城南西麓地域は、前段階と異なり8～B類の波状口縁を持つものが多くなる。鑄・碓氷地域では、4類～7類の口縁タイラでナイワンするものがみられ、地域によって所有する形類が異なってくる。

④ 群馬県全域では、1段階から9段階へ新しくなると形類が増えていく。このことは、型式の種類増加を表していることになるが、地域によって深鉢の型式組列が異なることから、深鉢に要求する用途・目的の増大と減少を表していると考えられる。このことは、諸磯様式の中に於ける文化的内容の変化として捉えることが出来るのではないだろうか。⁹⁾

⑤ 深鉢を16種類のカタチに分けたのであるが、この範疇に入らない特殊なカタチの土器がある(図2-16二単位波状口縁の土器)。このような土器については、深鉢の第一義的な機能とは別に、他の用途・役割を考えなくてはいけない。深鉢を16種類の基本形に分けたことで、この範疇に入らない、特殊なカタチの土器も浮き彫りになる。特殊なカタチの深鉢の役割については、出土状況や使用の痕跡など、別な角度から検討して行くことが必要になると思う。

諸磯様式の中で、時期によって文様が変わり、地域においても、その地域に特徴的な文様を持つ土器がある。それならば、カタチからみた場合にも、地域性や時代性

をみることが出来ないだろうか、という発想から検討してみた。カタチは、機能や目的によって決定されて社会内容を表すのであれば、カタチから見た型式組列を検討することで、社会変動がみられないだろうかと言うことである。本来ならば、土器型式は、土器の文様や器形など総合的に検討しなければならないことである。今回あえて、カタチという視点から考えることで、土器の文様や出土状況など様々な観点を付加して、諸磯様式における文化内容を捉えることが課題として浮上した。今後の課題としたい。

本稿を作成するに当たり、下記の方々には、資料見学・文献収集にお世話になりました。文末ですがお礼を申し上げます。

稲畑航平 長田友也 鈴木徳雄 大工原豊 谷藤保彦 寺崎裕助 綿田弘実

註

- 1) 諸磯式土器の編年研究には表記した人達以外に数多くの論考があり、筆者自身が把握しきれないものも数多くある。
- 2) 今村啓爾は、抽象論や出来合いの理論のあてはめ、民俗学的事例からの類推ではなく、その時代の人達から作り使った土器の具体的、実証的な分析からこの課題に迫るとしているが、筆者も同様の方法で行いたいと考えている。(今村2010)
- 3) 本稿での機能分化とは、深鉢の煮炊きという機能が単にものを煮炊きすると言うことではなく、煮炊きする「時・場・対象物」によって深鉢のカタチが変わり、深鉢形式の下位レベルで形式が増えることである。
- 4) 深鉢の第一義の用途であり、転用としては、その他貯蔵・棺などの用途がいろいろと考えられる。
- 5) 深鉢形式が煮炊きの機能に、時や場、煮炊きの対象物によって目的・用途が付加されたときにカタチが変わることを下位レベルの形式とした。
- 6) カタチの情報は、波状口縁の深鉢といった感覚的な内容で伝わるとすると、その波状の高さの度合いは、時代や制作者によって変わってくる。そのため、有・無を仕分けることにより、感覚的に曖昧なものを除くためである。
- 7) 4つの要素から出来た16種類のカタチについて、類のみである他との要素(文様)で分類した場合と紛らわしいために、カタチによる分類という意味で形類とした。
- 8) この図ではっきり見えるものとぼやっと見えるものでは、そのカタチに対する仕事量・必要量が異なることを感覚的に捉えることが出来ると思う。この見え方の差が、縄文時代人の深鉢に対する認知の差となるのではないだろうか。
- 9) 小林達雄は、「形式は、歴史的な叙述に必要な歴史的事実であるが故に、型式の細分はそれだけ具体的な歴史的事実の認識を豊かにするものである。」と型式細分の意味について述べている。(小林2002)

参考・引用文献

- 赤堀 仁 三上徹也 1994 「下島式・春ヶ峯式の再提唱とその意義」『中部高地の考古学Ⅳ』
- 稲野彰子 1991 「大木式土器に見られる球胴形深鉢について」『北上市立博物館研究報告』8 北上市立博物館 1-8頁
- 今村啓爾 1981 「施文順序から見た諸磯式土器の変遷」『考古学研究』27巻4号 86-93頁
- 今村啓爾 982 「諸磯式土器」『縄文文化の研究』3 雄山閣 211-223頁
- 今村啓爾 2000 「諸磯c式の正しい編年」『土曜考古』第24号 土曜考古学会 93-128頁
- 今村啓爾 2010 「研究の目的・経過・章の構成」『土器から見る縄文人の生態』同成社 2頁
- 岩橋陽一ほか 1992 「諸磯b式土器の展開とその様相—多摩丘陵からの視点—」『研究論集Ⅺ』東京都埋蔵文化財センター 45-76頁
- 可児通宏 1991 「縄文人の生活域を探る」『研究論集』東京都埋蔵文化財センター 131-148頁
- 金子直行 2006 「荒川流域における諸磯c式土器の成立と展開」『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会 105-128頁
- 小林達雄 1978 「縄文土器」『日本の美術』No145 至文堂 36頁
- 小林達雄 2002 「第3章 形式・型式・様式論」『縄文土器の研究』学生社 61-78頁
- 佐原 真 1987 「土器と弓矢とイヌと」『大系日本の歴史』1 小学館 67-104頁
- 縄文セミナーの会 1993 「第6回縄文セミナー 前期終末の諸様相」

- 資料集 縄文セミナーの会 1999 「第12回縄文セミナー前期後半の再検討」資料集・記録集 縄文セミナーの会
- 鈴木徳雄 1979 「諸磯式土器文様の変遷について」『白石城』埼玉県遺跡調査会 106-110頁
- 鈴木徳雄 1994 「諸磯a式の文様帯と施文域」縄文時代第5号 縄文時代文化研究会 53-76頁
- 鈴木徳雄 1996 「諸磯b式の変化と型式間交渉」縄文時代第7号 縄文時代文化研究会 1-32頁
- 鈴木敏昭 1980 「諸磯b式の構造とその変遷(再考)」『土曜考古』第2号 土曜考古学会 12-29頁
- 鈴木敏昭 2006 「諸磯c式土器に関する一断想」『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会 129-152頁
- 関根慎二 1995 「諸磯c式土器以前」研究紀要12 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1-28頁
- 関根慎二 1999 「縄文時代土器型式編年研究史 関東前期」『縄文時代』10 縄文時代研究会 244-250頁
- 関根慎二 2008 「諸磯式土器」『総覧縄文土器』小林達雄編 アムプロモーション 282-289頁
- 大工原 豊 1994 「中野谷地区遺跡群」安中市教育委員会
- 田中 琢 1978 「型式学の問題」『日本考古学を学ぶ』(1) 有斐閣 12-23頁
- 谷口康浩 1983 「形式に関する一般理論」『國學院雑誌』國學院大學 60-74頁
- 谷口康浩 1989 「諸磯式土器様式」『縄文土器大観』小学館 326-330頁
- 谷口康浩 1986 「縄文時代の親族組織と集団表象としての土器型式」『考古学雑誌』72巻2号 日本考古学会 137-157頁
- 谷口康浩 2003 「諸磯式期におけるセトルメントパターンの振幅」『和田西遺跡の研究』考古学を楽しむ会 3-22頁
- 中島 宏 1980 「諸磯b式土器について」『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ 伊勢塚・東光寺裏』埼玉県教育委員会 172-177頁
- 長崎元廣 1997 「中部地方の縄文前期末・中期初頭期における土器型式編年の系譜と展望(1)」長野県考古学会誌83・84・85号 24-75頁
- 長崎元廣 1998 「中部地方の縄文前期末・中期初頭期における土器型式編年の系譜と展望(2)」長野県考古学会誌83・84・85号 24-98頁
- 長沢宏昌ほか 1989 「花鳥山遺跡・水呑場北遺跡」山梨県埋蔵文化財センター
- 羽生淳子 1984 「縄文土器の類似度」『信濃』36巻10号 59頁
- 松田光太郎 1993 「諸磯a式土器の文様とその変遷」『古代文化』45巻6号 古代学協会 14-28頁
- 松田光太郎 1994 「縄文時代前期後半諸磯b～c式土器(第Ⅲ群土器)の考察」『愛宕山遺跡』群馬県富士見村教育委員会 255-307頁
- 松田光太郎 2001 「関東・中部地方における諸磯c式土器の変遷」神奈川考古第37号 1-30頁
- 松本直子・中國 聡・時津裕子 2003 「認知考古学と何か」青木書店
- 細田 勝 1992 「諸磯c式土器研究への一視点」『埼玉考古』第29号 埼玉考古学会 19-42頁
- 細田 勝 1996 「縄文前期終末土器群の研究—地域差と系統差の統合的解釈に向けて」先史考古学研究第6号 1-50頁
- 細田 勝 2000 「諸磯c式土器変遷に関する二・三の問題」『土曜考古』第24号 土曜考古学会 129-150頁
- 細田 勝 2002 「諸磯式土器の変遷過程」研究紀要第17号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 29-59頁

群馬県内集計遺跡

愛宕山、荒砥上諏訪、荒砥北三木堂、糸井宮前、稲荷山、今井三騎堂、今井道土Ⅱ、内出Ⅰ、江木下大日、江木大日Ⅱ、榎木畑Ⅱ、大上、大友館、行田梅木平、行田大道北、善上、粕川、勝保沢中ノ山、上泉太郎三前、上大屋、上丹生早道場、上丹生屋敷山、上百駄山、亀泉坂上、萱野Ⅱ、川白田、黒熊(3)、小仁田、五目牛南組、五料野ヶ久保、坂上(富士見)、佐久間、鞘戸原、三平、三和工業団地、芝山、清水山、下高瀬寺山、下遠原、白川、白倉、白井遺跡群、白井北中道Ⅲ、白井佐又、白井十二、白岩浦久保、陣馬、神保植松、滝沢日向堀、横沢向山、田中田、寺回、天神原、富田大日Ⅱ、中畦、中川原(大胡)、中棚、中野谷松原、沼南、野村、芳賀北曲輪、芳賀東部団地、半田南原、広面、吹屋伊勢森、吹屋中原、堀越丁二本松、見立八幡、三峯神社裏、三原田仲井、三原田三反田、向吹張、柳久保Ⅴ、藪塚、山名柳沢、横俣Ⅰ、六万

東京都集計遺跡

雨間、伊皿子貝塚、宇津木台Ⅱ、小山田遺跡群Ⅱ、堅台、川島谷Ⅰ、駒沢学園高地内、高燥遺跡、多摩ニューNo175、多摩ニューNo182、多摩ニューNo201、多摩ニューNo205、多摩ニューNo278、多摩ニューNo344、多摩ニューNo352.363、多摩ニューNo359.563、多摩ニューNo395、多摩ニューNo424、多摩ニューNo426、多摩ニューNo45、多摩ニューNo482、多摩ニューNo558、多摩ニューNo669、多摩ニューNo71、多摩ニューNo733、多摩ニューNo753、多摩ニューNo753、多摩ニューNo891、多摩ニューNo91、七社神社前、半蔵窪、東新山D、藤の台Ⅳ、本町田、南八王子地区、三矢田、雪ヶ谷貝塚、代継・富士見台、四ツ葉地区、和田西